

文化映画紹介

「『やさしく』の意味」おばあちゃんは認知症だった」
映学社作品

渡部美

【スタッフ】制作統括・監督／高木裕己 原作／三輪実由
「やさしくする」ということ
脚本／浅尾政行、高木裕己
企画協力・医学指導／玉井顯
撮影／中井正義 照明／長谷川明夫 録音／西島房宏 音楽／加藤由美子 編集／高木裕己 助監督／佐々木利男
制作主任／川下和裕 キャスティング／東平七奈 出演／栗本有規ほか 後援／敦賀市教育委員会 協力／敦賀市、敦賀市長寿健康課、敦賀市立敦賀南小学校、市立敦賀病院、平和堂アル・ブラザ敦賀、ケア・サービス・アイ、ほっとステーション、銀河会・児童合唱団 挿入歌／「空より高く」製作・著作／映学社 完成／19年 DVD作品 33分

【内容】今回も前回と同じく短篇の教育映画を紹介したい。「やさしく」の意味「おばあちゃん」は認知症だった。は副題のとおり、日本社会における高齢者の認知症問題にスポットを当てた作品である。日本では2025年に65歳以上の5人に1人が認知症患者になると言われている。これは深刻な問題であるが、認知症に罹った人にはどのような接し方があるのか分からず、戸惑いのイメージが先行しているのが現状ではないだろうか。そのようななか、福井県敦賀市で開催された「小中学生の認知症サポーター作文コンテスト」で最優秀作品賞に選ばれた小学4年生（当時）の三輪実由さんの作

文「やさしくする」ということ」という作文を脚色し、劇映画にしたのが今回の作品である。物語を簡単に説明すると、主人公の実由の家は母親、祖母、曾祖母までが暮らす大家族である。曾祖母はなんと101歳であるが、手押し車を頼りに一人で外出もする。小学生の実由は、きよと毎日接している。けれど最近、きよは実由に「今日は何曜日だね？」と聞くことが多くなった。実由が「何曜日」と教えても、きよは再び、同じことを聞いてくる。それが一日に何度も続くと、さすがに実由もイヤになり、宿題もできないと言いつつ、同じことを何度か聞いてくるのは認知症の典型的な特徴である。

問題はきよ本人ではなく、きよと同居する家族の対応にある。そんな時、介護の仕事をしている祖母は「きよばあには百回、教えてあげてな」とやさしく実由を諭す。このような環境であるから、実由も少しづつ、認知症のことが分かって始めてくる。そこで実由は、きよに向かって曜日のことを、根気よく教え始める。すると、やさしく接してくれる実由にきよはとても嬉しそうな表情をする。この辺りのエピソードは作者の実由さんの体験から生まれたものである。高齢者と身近に接している人の心構えのようなものが、よく伝わってくる。

ここで映画はもう一步、踏み込んだエピソードを見せる。それはきよが実由に習字を見せる場面である。長い経験からさまざまなことをなしてきてきたきよばあちゃん。そのきよが今も自分の得意とする習字を披露する。そればかりか、実由にそれを教えることで、彼女も生きがいを感じるのだらう。

物語は後半で、これも作者のシリアスな体験と思われるエピソードを入れる。ある日、きよは病院へ行くと言って一人で行った。実由は彼女を見送ったが、きよは夕方になっても帰ってこない。その時、実由は、祖父から頼まれていた名札カードをきよに渡し忘れていたことに気が付く。こ

高齢者と付き合うには

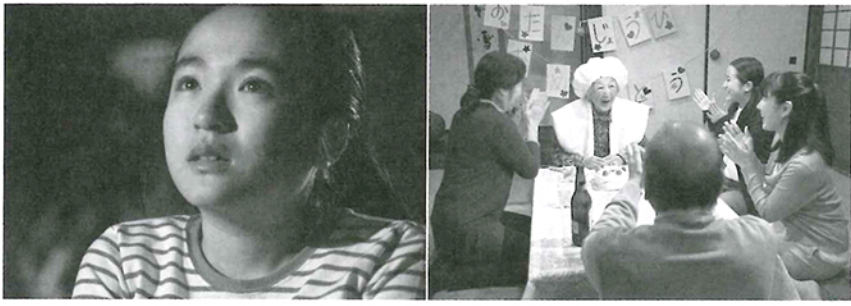
の出来事は幸い、きよが発見されたことで無事に済んだが、子どもであっても、高齢者と一緒に暮らすのはとても大変なこと、常に緊張感をもっていなくてはならない。

実由が4年生になろうとしていた春の日、きよは102歳となり、家族でお祝いをした。見由はきよに歌をプレゼントする。

学生の視点から見たおばあちゃんを描いている点が良い。年少者と高齢者のコミュニケーションはこれも個人差があることかもしれないが、日常の会話のなかに、嬉しいこと

楽しいことを見出して、共通の話題を作るのがいかに大事かがわかる。一緒に過ごすことと自身が双方にとって重要なことなのだ。

は、認知症になっても住み慣れた地域で安心して生活が続けられる町を目指し、認知症の理解啓発、早期発見に取り組んでいる。2010年度から小中学生を対象とした認知症サポーター養成講座を積極的に開催し、認知症サポーターの数も2017年度で1万人を超えたという。その実績を踏まえ、養成講座を受講した児童を対象に作文コンテストを実施した。認知症はそれに罹った本人も辛いことであるが、周囲の人々も苦労する。その対策も地域によってさまざまであるが、敦賀市のようにまずサポーターの養成から始めるのも順当な考えである。そしてまた、今回のように認知症のおばあちゃんを中心に小学生との触れ合いを通して高齢者の喜怒哀楽、人権といったものを分かりやすく描くことも映画の役割である、と感じ入った次第である。2019年度教育映像祭優秀作品賞。文部科学省選定作品。問い合わせ先／映学社03-3359-19729



常で経験した高齢者との生活を、さらに描いているが、これを複雑な人間関係のドラマにせず、おばあちゃんはおばあちゃん、小学生は小学生といった象徴的な設定にしてその役割を簡潔な描写で見せている。それゆえ、小学生の見聞した認知症のおばあさんとの出来事を映画化したこの作品は、同じ小学生が鑑賞しても十分に理解がおよぶことであろう。作画的でない俳優の演技には、鑑賞者が自分の家族を思い起こしたり、自分の場合どのような行動をとるだろうかということまで想像させる余白がある。

長年、短篇映画で社会教育映画を製作し続けてきた映学社が社会貢献を目的として（社）生涯学習支援機構を創設。そこで作文コンテストを実施した。協力した福井県敦賀市